

前回、ミツの一生は〈他者に仕える人生〉であり、彼女は意識していなくても、「神の声《くたびれた顔の囁き》に耳を澄まし続けた」生涯だったと書きました。『(遠藤文学の)すべての作品の基調にあるのは〈愛〉と〈聖化〉を希求する氏の真摯な姿勢である』と、武田友壽氏は書いています。今回は現代社会の危機的状況を取り上げながら「愛」について考え、『わたしが・棄てた・女』に沿った話をまとめたいと思います。

『わたしが・棄てた・女』が問いかけるもの

『わたしが・棄てた・女』が、『主婦の友』誌に掲載されたのが1963(昭和38)年。翌年、単行本が刊行され、1972(昭和47)年12月に文庫本が出たので、わたしがこの小説を読んだのは22歳ということになります(第1回で「20歳の時…」と書きましたが記憶違いでした。おわびして訂正いたします)。もう42年前(!)になります。

はじめは吉岡と長島の下宿生活や、金さんとのやり取りに笑いながら読んでいたのですが、ページをめくるごとに物語の中にグイグイ引きずり込まれていきました。みなさんも小説を読んでいて、あと数ページで結末をむかえるとき、「終わらないでほしい…」と思った本が何冊かあるのではないのでしょうか。わたしにとってその中の1冊がこの本でした。

平凡であり取り柄がなく、楽しみといえば休日に友だちと映画を観たり、買い物をする…という、私たちが日常生活で出会う「どこにでもいるような女性」であるミツ。そのあまりにも悲しい人生において、彼女はいつの間にか自分には歩めそうもない道を歩いていた…ということが、「生きる意味とは？」というむずかしい問題をわたしに突きつけました。また、吉岡の生き方の中に青春真っ只中にある自分の姿を見出し、こころの痛みを感じざるを得ませんでした。

〈愛する〉— 山浦玄嗣先生の言葉を借りれば、目の前にいる人を〈大切にする〉とはどういうことなのか。これこそ遠藤氏がその文学において追及し、描いてきたものです。

ミツはその人生で出会った人たちを〈大切に〉しました。自分を捨てた吉岡を、田口さんの家族を、絶望の中で生きざるを得なかったハンセン病の患者さんたちを…。その姿が私たちをもう一度、「人間らしさとは何か?」、「愛するとは何か?」という問いの前に立たせてくれます。

現代日本社会の危機的状況

『収容所で自らの命を差し出した聖マキシミアノのように、わたしたちも絶望の暗闇に満ちるこの世に、神の光を照らすことができますように』

これはわたしが所属している《けがれなき聖母の騎士会》の「8月の意向」の言葉です。(「けがれなき聖母の騎士会」については後日書こうと思います。) 私たちが暮らしているこの世を、「絶望の暗闇」とまで言い切っています。そう言わざるを得ないほど、現代社会が危機的な状況に置かれていることを訴えています。

毎日のマスコミ報道を見れば、一目瞭然でしょう。介護・医療に関する費用、さらに年金・生活保護費の削減。「使い捨て労働」による格差と貧困の拡大。企業並みの成果主義・競争主義などに

よる人間尊重教育の衰退。そうした教育の中での児童生徒間のいじめ、自殺の増加。家庭崩壊に伴う親子の殺傷事件、子どもへの虐待の多発。高齢者の孤独死。無差別な殺傷事件。「戦争ができる国」にするための憲法・〈9条〉改憲、集団的自衛権行使の容認。あれほどの犠牲者を出し、3年半経った今も「復興」という言葉にほど遠い東日本大震災の被災地の現状が目の前にありながら、原発再稼働を進める政府・大企業。数えあげたらキリがないほどです。浜矩子氏は、『アホノミクス』によって「富国」をめざし、憲法「改正」で「強兵」をめざす』と安倍暴走内閣を批判しています。

このような日本社会に、どれほどの「人間らしさ」が見られるでしょうか？ お互いをかけがえのない存在として「大切にしている」と感じますか？ 〈いのち〉を大切にしていると言えますか？ 少数の人たちや、小さな社会集団の中では見られるかもしれませんが、でもそれが、広がり深まることはあまりありません。第6回で書いた〈みんな〉の中に埋没してしまっている人たちが多すぎるのではないのでしょうか？

カトリック大阪大司教の池長潤師は、『安倍首相の打ち出す今の政治のはらむ危険を克服していくために、(中略)われわれの中で人間性をゆたかに回復させる必要がある』り、『キリストの教えでも、人間にとって一番大切なことは、人間として、他人も自分も大事にすることです。人間性が深いところで問われ、その気づきが求められています』と新聞紙上で書かれています。

「他人も自分も大切にする」、つまり『互いに愛し合いなさい』というイエスの言葉を、わたしたちは今こそ言動によってあらわすことが求められています

「エゴイズム」を打ち砕くためには

上記のような危機的状況をもたらしたのは一部の権力者であり、それを支持する人たちであることはもちろんです。でも、それだけでしょうか。私たちがあまりにもそうした現実を真剣に考えようとしていないからではないのでしょうか。自分が安全で、フツウの生活をしていればいいや … と思っている人たちが圧倒的に多いような気がします。自分の生活・人生を支えてくれている〈他者〉は脇に置いて …。

第7～9回にかけて【罪と良心】の問題について触れ、森一弘師のことばをいくつか紹介しました。私たちは人間としての弱さ、未熟さ、そして自己中心性(エゴイズム)から、他者を傷つけたり、苦しめたり、負担をかけたりしている。それが罪である。私たち一人ひとりが〈人間として何を大切に生きようとしているか〉という問いが突きつけられている …… ということを森師は主張していました。

では、エゴイズムを克服するにはどうしたらいいのでしょうか。遠藤氏は、人間は〈愛〉に生きる時、はじめて〈エゴイズム〉から自分を救うことができ、自分の〈人間らしさ〉の回復を実現できると信じ、多くの作品を書きました。森師の「何を大切に生きようとするか」の問いに遠藤氏はそのすべての作品の中で、「それは愛以外にない！」と答えているのだと思います。

〈小さな光〉を集めましょう

吉岡に『理想の女というものが現代にあるとは誰も信じないが、ぼくは今あの女を聖女だと思っている』と言わせ、修道女スール・山形に『もし神が私に、どういう人間になりたいかと言われれば、私は即座に答えるでしょう。ミッチャンのような人にと』と、手紙に書かせた森田ミツの人生

は、平々凡々な私たちでも〈愛に生きる〉＝〈目の前にいる人を大切にする〉ことはできるのだという証なのです。

もちろん、ミツのように生きるとはとても難しいことです。私たちには何十分の一、何百分の一しかできないでしょう。しかし、「わたしには無理 …」とあきらめてしまえば、そこでその人はエゴイズムを突き破る機会を放棄してしまうことになります。

ミツの何十分の一、何百分の一でもいいじゃないですか！ 私たち一人一人が灯す〈人間らしさ〉という光は、小さいかもしれませんが、しかし、その小さく弱い光でも、数百・数千・数万 … と集まれば、大きな〈たいまつ〉になるはずですよ。ミツはそのことを私たちに教えています。

暗ければ暗いほど、光はその輝きを増します。

【引用・参考にした書籍及び資料】 ・遠藤周作 『わたしが・棄てた・女』

・武田友壽 『解説』（『わたしが・棄てた・女』巻末）

・けがれなき聖母の騎士会『2014年 M.I. 毎月の意向』より『8月の意向』

・上智大学夏期神学講習会における資料 竹内修一『希望 — いのちからの平和への招き』

及び、竹内師の資料中の 浜 矩子『平和憲法を守りなさい』、池長 潤『人間性の回復かけ改憲に立ち向かう』

これからキリスト教を学びたい、あるいは教えを知りたいという皆様のために、遠藤周作氏の小説『わたしが・棄てた・女』を題材に話を始めて、今回で30回を迎えました。拙文を書くために、この小説を以前とは比べものにならないほどじっくり読むと、そこから読みとることができるキリスト教の、そしてイエスの重要な教え・真理がなんと多く隠されていたかがわかり、驚きました。読んでくださる皆さんにわかりやすく説明していくことが、じつは自分自身にとって新しい発見の連続でした。この仕事を与えてくださったバルトロマイ前桐生教会神父様をはじめ、関係された皆様にごころから感謝いたします。キリスト教教理のほんの少ししか書けませんでした。おゆるしくください。山積された残りの項目は、今後の仕事とさせていただければさいわいです。

このコーナーに『あぁ、そうなんだ塾』と命名したのは、読んでくださる方々がそれまでキリスト教、あるいはイエスについて知っていた事柄について、いろいろな角度から説明することによって「あぁ、そうなんだ！」と思っていただこうという意図がありました。何度そう思っていただけか…。また、第1回で井上ひさし氏の言葉を借り、作成の心がまえを書きましたが、〈むずかしいことを やさしく／ …〉ということが、なんとムズカシイことなのか、痛感いたしました。どれだけ教理をわかりやすく書けたか、あまり自信がありません。これからも、誠心誠意取り組むこととお約束いたしますので、おゆるしくください。

「人の禪で相撲を取る」といいますが、この『… 塾』は、まさにそのものズバリ！ 上智大学神学部の先生方をはじめとする夏期神学講習会の先生方、神父様、… の「ふんどし」をお借りしながら書くことができました。ありがとうございました。これからも後ろめたさを感じながら、遠慮なくお借りいたしますので、よろしく願いいたします。また、この連載を楽しみにしていただいた親友のU様、虎仲間のK様、理髪店のA様、接骨院のY様、教会の大先輩H様と美声のT様、中学校の教え子Oさん … みなさまの激励の声がなかったら、ここまで続けられませんでした。ごころからのお礼と感謝を申し上げます。

次回から、また新たな視点からこのコーナーを進めていきたいと考えております。これからもお付き合いのほど、よろしく願いいたします。 みね